

九州大学附属図書館報

図書館情報

The Kyushu University Library Bulletin

Vol. 36, No. 1 (2000)

目 次

図書館あれこれ.....	1
チャーチル閣下の化学兵器.....	3
第41回貴重文物展観及び公開講演会を開催.....	4
マルチメディア掲示板の設置について.....	5
本年度の研究開発室活動.....	6
筑紫中央図書室の開室について.....	7
平成12年度附属図書館商議委員名簿.....	9
平成11年度特別図書購入一覧.....	10
平成11年度図書館利用統計.....	11
自著紹介.....	15
本学関係者著作寄贈図書.....	17

図書館あれこれ

六本松分館長

押 川 元 重

今、教育改革が課題となっているのは、教育をめぐる環境が大きく変化してきていることにあると思います。その一つが学問情報の量および質における変化です。人々が学問情報の取得に苦労した時代とは違って、溢れる学問情報の中からいかに効果的に取捨選択するかが問われるようになっていきます。私は、大学1年生の夏休みにある知人の書棚の本をすべて読むという目標をたて、それを実行したことがあります。もし当時も今のように本が溢れていたならば、そのような目標を立てることもなかっただ

ろうと思います。

数年以上前のことになりましたが、図書館学の専門家が投稿した新聞記事を読んだことで強い反発を感じたことがありました。当時の私は教養部長として六本松分館と関わるようになったことから、図書館というものに関心を持つようになったばかりでした。分館の運営経費の問題もありましたが、何よりも気がかりなことは、六本松地区で最も



通しつつ捉えようとする、群集生態学のテキストとして斬新な試みである。複数の生物種が共存することは、地球上における生態系の最も基本的な特性であり、共存のパターンとメカニズムを探ることは群集生態学の中心的課題である。本書では13章にわたって、多様性の時間的・空間的模式を大から小におよぶあらゆるスケールで概観した後、共存のメカニズムについて様々な視点から考察している。内容的には大学院レベル以上の者に適切であり、生態・進化学の国際誌TREEの最新の号で「多岐にわたる問題を表面的にはなく掘り下げて取り扱い、新しい視点を提供する刺激的な本」と紹介された。同じブラックウェル出版から出ている生態学の入門レベルの教科書と比べて英語が難しいが、研究者を志す者にとっては良い参考となる。

ヴォルフガング・ミヒェル(大学院言語文化研究院教授)

『Von Leipzig nach Japan : Der Chirurg und Handelsmann Caspar Schamberger(1623 - 1706)』

[六本松分館 289 3 / Sc 1 / 58990052]

ライプツィヒから日本へ

人文科学における学術論文の構成や文体が、文化圏によりかなり異なっているのは周知のことであるが、ドイツ人の文章は長くて複雑なことと、膨大な脚注とで知られている。筆者も、学校や大学で長年の間に身につけてしまった、このドイツ的風潮の犠牲者といえなくもないが、一方で英語圏の著者達の明瞭な文章に憧れてもいる。今回の本の執筆にあたっては、学術的な正確さと洗練された文体を両立させ、「Historia」という語の原義(歴史・物語)を再考しつつ筆を進めようと心がけた。

カスパー・シャムベルゲルの「物語」の舞台は17

世紀、日本が外界との交流を制限していた時代である。以前から彼は医史学者の間で、日本の紅毛流外科の始祖として知られてはいたが、その生涯にわたる経歴や日本で誕生した新しい医学パラダイムの背景などについてはほとんど謎のままだった。偶然発見した資料に触発され、筆者は90年代の夏はほとんど旧東ドイツやオランダ、日本の公文書館、図書館、個人のコレクションの調査にあけくれた。ときには困難を伴うこともあったが、それでも次第に、この人物の詳細な生涯像や当時の状況が明らかになっていった。30年戦争中の幼年期、当時のライプツィヒにおける外科医と床屋組合の確執、ギルドでの見習い修行、各地への修行の旅、オランダ東インド会社入社、バタヴィアへの航海、1649年から1651年までの2年間の日本滞在(そのうち半分は江戸に滞在)、通詞猪股伝兵衛の業績、大目付井上筑後守政重の役割、新しい医学パラダイムの構成要因、「カスパー流外科」の普及に寄与した弟子河口良庵、シャムベルゲルのヨーロッパへの帰郷、商人としての第2の人生、彼の家族と財産、晩年と死、シャムベルゲル家の没落等々を本書では取り上げている。

この「歴史上の探検」を続ける中で、筆者は大いに刺激を受けた。普段なら決して出会うことのない人々と知り合うことができ、また、シャムベルゲルの足跡をたどるため、私にとっては未知の国であった旧東ドイツへも毎年出かけて行くことになった。こうして1990年の東西ドイツ統一後のライプツィヒを覆っていた挫折感や、人々の歓喜と不安、その後の復興への手探りの努力などに現地できかに触れることができたことは、得がたい体験であった。